

第13章

ヘレロ語の名詞の声調 (Bantu R31)¹

米田信子

1. はじめに

ヘレロ語はニジェール・コンゴ語族に属するバントゥ諸語のひとつで、南部アフリカに位置するナミビアおよび隣接するボツワナとアンゴラで話されている。話者数は約211,700人である (Eberhard et al. 2019)。ヘレロ語は、ナミビア北西部からアンゴラにかけて話されている「カオコランド・ヘレロ語」、ナミビア中央部で話されている「中央ヘレロ語」、ナミビア東部からボツワナにかけて話されている「東部ヘレロ語 (ンバンデル語)」に分けられる。本稿で扱うのは中央ヘレロ語である²。

ヘレロ語には多くのバントゥ諸語と同様に声調の対立がある。語彙レベルだけでなく文法レベルにおいても声調の対立がみられる (米田 2012)。

●語彙レベルの対立

(1) a. oðoŋgóró³ 「シマウマ PL」

¹ 本稿は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」、および国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究プロジェクトの成果の一部である。

² 本稿で用いるデータは2008年2月～3月、2009年2月～3月にナミビアの首都ウィントフックで行なった調査で筆者が収集した。コンサルタントは1966年ナミビアの首都ウィントフック生れのヘレロ人女性AK氏で、中央ヘレロ語の母語話者である。

³ ヘレロ語の音素は次のとおりである。母音 /a, e, i, o, u/, 子音: 閉鎖音 /p, t, k/, 摩擦音 /θ, f, h, v, ð/, 鼻音 /m, ŋ, n, ɲ/, 前鼻音閉鎖音 /^mb, ^d, ^ɗ, ^ɗg/, 流音 /r/, 接近音 /w, j/. ヘレロ語には正書法があり、/j/ は tj と表記される。この音価について本稿では [j] としているが、多くの先行研究 (Köhler 1958, Elderkin 1999, Möhlig et al. 2002, Möhlig 2003, Möhlig & Kavari 2008) では [ɟ] となっている。これらの先行研究ではカオコランド・ヘレロ語話者から収集したデータが用いられている。一方、本稿で用いるデータは中央ヘレロ語話者から収集したものである。中央ヘレロ語話者のデータを用いた湯川 (1998) も [j] としている。コンサルタントは常に [j] と発音していたが、中央ヘレロ語話者でも少し北に行くと [ɟ] という発音が聞かれることから地方によって [j] と [ɟ] のバリエーションがあるようである。また Möhlig et al. (2002: 17) は母音に

- b. oḍoŋgoro 「ひざ PL」
(2) a. -póra 「引き抜く」
b. -póra 「冷める」

●文法レベルの対立

- (3) a. mbavérééré 「ずっと前に私は病気だった。」 (遠過去完了)
b. mbávéréére 「少し前に私は病気だった。」 (近過去完了)

音声的には数段階の高さが聞かれるが、声調素としては高声調 H(igh) と低声調 L(ow) の2つ、TBU は音節である。

ヘレロ語の名詞の声調体系のなかで最も特徴的なのは、名詞に見られる「声調格 (tone case)」と呼ばれる声調による屈折システム、および名詞に 2ⁿ とおり (n は名詞語幹の音節数) の声調パターンが存在することである。本稿では、これらの特徴を中心にヘレロ語の名詞の声調について報告する。

2. 名詞の声調

ヘレロ語の名詞の声調は、名詞語幹の声調と名詞接頭辞の声調によって決定される。各名詞語幹は独自の声調形を持っている。また、ヘレロ語では名詞の屈折が名詞接頭辞の声調によって表される。したがって、用いられる屈折形、すなわち、その名詞が現れる文中の位置や文の種類によって名詞接頭辞の声調形が異なる。以下、2.1 では名詞の構造、2.2 では名詞語幹の声調形、2.3 では名詞接頭辞の各屈折形の声調形について、詳しく見ていくことにする。

2.1 ヘレロ語の名詞の構造

本題である声調の説明を始める前に、ヘレロ語の名詞の構造について説明する。(4) で示すように、ヘレロ語の名詞は、冒頭母音・名詞クラス接頭辞・名詞語幹という3つの要素で構成される。本稿では、冒頭母音と名詞クラス接頭辞を合わせて「名詞接頭辞」と呼び、まとめて扱うことにする。ヘレロ語の

長短の対立があるとしているが、挙げられている例はいずれも同じ母音の連続であると考えられる。

名詞は、他の多くのバントゥ諸語と同様に「名詞クラス」と呼ばれるグループに分かれている。名詞接頭辞はその名詞クラスを表す接頭辞である。各名詞クラスの名詞接頭辞⁴については表 1 を参照されたい。

(4) 名詞の構造

o- mu- kázóna > omukázóna 「娘 SG」
 冒頭母音－名詞クラス接頭辞－名詞語幹
 |← 名詞接頭辞 →|

表 1. 名詞クラスと名詞接頭辞

名詞 クラス	名詞 接頭辞	名詞例	意味	名詞 クラス	名詞 接頭辞	名詞例	意味
1	omu-	omunéné	親 SG	2	ova-	ovanéné	親 PL
1a	Ø-	taté	父親 SG	2a	oo-	ootaté	父親 PL
3	omu-	omuðe	根 SG	4	omi-	omiðe	根 PL
5	e-	ekundé	豆 SG	6	oma-	omakundé	豆 PL
7	oʃi-	oʃihape	実 SG	8	ovi-	ovihape	実 PL
9	o-	oŋgombe	牛 SG	10	oðo-	oðoŋgombe	牛 PL
11	oru-	orutu	身体 SG	12	otu-	otutu	身体 PL
13	oka-	okatí	棒 SG	14	ou-	outí	棒 PL
15	oku-	okuwoko	腕 SG	6	oma-	omawoko	腕 PL

名詞接頭辞は、(5a) や (5b) のように基本的には V-CV もしくは V-V という 2 音節構造であるが、5 クラス (5c) と 9 クラス (5d) は名詞クラス接頭辞が Ø- (ゼロ接頭辞) のため名詞接頭辞は冒頭母音のみ、すなわち 1 音節となる。また数は少ないが、(5e) が示す 1a クラスのように名詞接頭辞が付かない名詞もある。

⁴ 名詞クラスとそれを基盤とする文法呼応システムはバントゥ諸語に共通してみられる特徴である。比較研究のために名詞クラスにはバントゥ祖語を基に一定の基準で番号が付けられており、本稿もそれに沿って名詞クラスに番号を付けている。

- (5) a. o-ðo- mbapíra > oðombapíra 「紙 PL (10 クラス)」
 b. o-ma- tiva > omativa 「バッタ PL (6 クラス)」
 c. e-Ø- tiva > etiva 「バッタ SG (5 クラス)」
 d. o-Ø- mbapíra > ombapíra 「紙 SG (9 クラス)」
 e. Ø-Ø- até > taté 「父親 SG (1a クラス)」

2.2 名詞語幹の声調形

名詞語幹は各音節に高声調 H と低声調 L の対立がある。したがって名詞語幹には 2^n とおり (n は名詞語幹の音節数) の声調形が見られる。具体的には、1 音節語幹の名詞には $2^1=2$ とおり、2 音節語幹の名詞には $2^2=4$ とおり、3 音節語幹の名詞には $2^3=8$ とおり、4 音節語幹の名詞には $2^4=16$ とおり、5 音節語幹の名詞には $2^5=32$ とおりの声調形があるということになる。ただし理論的にはそうであっても、4 音節語幹以上になると名詞自体の数が限られているため、実際にはすべての声調形の名詞が見つかっているわけではない。以下に語幹の音節数別に例を示す。なお、名詞接頭辞については、最も基本的な 2 音節の名詞接頭辞の名詞の例を示す (名詞接頭辞が 1 音節の名詞の例は 4.2 節で示す)。高声調は H (´) ●、低声調は L (印なし) ○で表す。(LL-) は名詞接頭辞の基本形の声調 (後述) で、その右側に示したのが名詞語幹の声調である。

1 音節名詞語幹 (2 とおり)

- (6) a. (LL-) L omu-ðe (○○-) ○ 「根 SG」
 b. (LL-) H omu-tí (○○-) ● 「木 SG」

2 音節名詞語幹 (4 とおり)

- (7) a. (LL-) LL ofi-hape (○○-) ○○ 「果物 SG」
 b. (LL-) LH ofi-vavá (○○-) ○● 「翼 SG」
 c. (LL-) HL ofi-tíha (○○-) ●○ 「机 SG」
 d. (LL-) HH oru-táví (○○-) ●● 「枝 SG」

3 音節名詞語幹 (8 とおり)

- (8) a. (LL-) LLL omu-paṅgure (○○-) ○○○ 「裁判官 SG」
 b. (LL-) LLH ou-tukaré (○○-) ○○● 「衰え・弱さ」
 c. (LL-) LHL ovi-maríva (○○-) ○●○ 「お金 PL」
 d. (LL-) LHH oḡi-nambáká (○○-) ○●● 「カエル SG」
 e. (LL-) HLL oḡi-pwíkiro (○○-) ●○○ 「収納庫 SG」
 f. (LL-) HLH oḡi-ǰáuví (○○-) ●○● 「蜘蛛 SG」
 g. (LL-) HHL omu-káḡóna (○○-) ●●○ 「娘 SG」
 h. (LL-) HHH omu-káḡéndú (○○-) ●●● 「女 SG」

4 音節名詞語幹 (理論的には 16 とおりだが、見つかっているのは 9 とおり)

- (9) a. (LL-) LLLL oḡi-jariḡiro (○○-) ○○○○ 「印 SG」
 b. (LL-) LLHL oḡo-reḡeváte (○○-) ○○●○ 「村 PL」
 c. (LL-) LHLL oḡi-naḡgúḡuna (○○-) ○●○○ 「カニ SG」
 d. (LL-) LLHH omu-korombátá (○○-) ○○●● 「ミミズ SG」
 e. (LL-) LHLH oḡi-hakáutú (○○-) ○●○● 「芋 SG」
 f. (LL-) HLLL omu-ḡóróngondo (○○-) ●●○○ 「パイソン SG」
 g. (LL-) HLHL oḡo-húḡguríva (○○-) ●○●○ 「ニワトリ PL」
 h. (LL-) HHLH oma-kúrúḡuḡgí (○○-) ●●○● 「人生 PL」
 i. (LL-) HLHH oru- kwépaéré (○○-) ●○●● 「ウサギ SG」

以下、見つかっていない声調形

- j. (LL-) LLLH (○○-) ○○○●
 k. (LL-) LHHL (○○-) ○●●○
 l. (LL-) LHHH (○○-) ○●●●
 m. (LL-) HLLL (○○-) ●○○○
 n. (LL-) HLLH (○○-) ●○○●
 o. (LL-) HHHL (○○-) ●●●○
 p. (LL-) HHHH (○○-) ●●●●

5 音節名詞語幹（理論的には 32 とおりだが、見つかっているのは 2 とおり）

(10) a. (LL-) LLLLLL oma-rarakanenu (〇〇-) 〇〇〇〇〇 「競争 PL」

b. (LL-) HHHHLL oma-θérékárérwa (〇〇-) ●●●●〇 「物語 PL」

（見つかっていない声調形は省略）

2.3 名詞接頭辞の声調形と声調格 (Tone case)

既述のとおり名詞接頭辞は、基本的には、冒頭母音 V と名詞クラス接頭辞 CV（もしくは V）が合わさった 2 音節の構造である。実際には、5 クラスと 9 クラスのように名詞クラス接頭辞がゼロ (Ø-) のために冒頭母音 V だけで名詞接頭辞となっているもの（その場合は 1 音節）や、1a クラスのように名詞クラス接頭辞だけでなく冒頭母音も付かないゼロ接頭辞もあるが、ここでは名詞接頭辞の最も基本的な形である VCV の 2 音節の名詞接頭辞を例にして名詞接頭辞の声調を見ていく。名詞接頭辞が 1 音節の場合とゼロ接頭辞の場合については、それぞれ 4.2 と 4.3 で述べる。

2.2 で挙げた例では名詞接頭辞がいずれも LL となっているが、実際には名詞接頭辞には LL、LH、HL という 3 種類⁵の声調形がある。この名詞接頭辞の声調形がヘレロ語の名詞の屈折を示している。Möhlig たちの研究 (Möhlig et al. 2002, Marten & Kavari 2005, Möhlig and Kavari 2008, Kavari et al. 2012 他) では、LL は基本形 (D: default)、LH は補語形 (C: complement)、HL は提示形 (P: presentative) と名づけられている。湯川 (1998) でも同様に、名詞接頭辞の声調は LL、LH、HL の 3 種類の実現形が区別されており、LL を基本としている。2 音節語幹と 3 音節名詞語幹の名詞を例にして、(11) と (12) にそれぞれの屈折形を挙げる。(11b, c) と (12b, c) は、音韻規則が適用され、() 内に示した実現形で現れるが、これらの音韻規則については 3 節で詳しく述べる。

⁵ Möhlig et al. (2002), Marten & Kavari (2005), Kavari et al. (2012) はこれら 3 つ以外に「呼びかけ形」があるとしている。しかしこれは基本形 LL の冒頭母音が落ちていただけであり、本稿ではこれを独立した声調格としては扱わない。

(11) oʃihape 「果物」

- a. 基本形 **oʃi-hape** LL-LL
- b. 補語形 **oʃi-hape** LH-LL (> LHHL)
- c. 提示形 **óʃi-hape** HL-LL (> HHLL)

(12) omukáǎóna 「娘」

- a. 基本形 **omu-káǎóna** LL-HHL
- b. 補語形 **omú-káǎóna** LH-HHL (> LHMML)
- c. 提示形 **ómu-káǎóna** HL-HHL (> HHMML)

(11) と (12) が示すように、ヘレロ語ではいずれの名詞も 3 種類の屈折形、すなわち 3 種類の異なる実現形を持っている。声調によって表されるこのような屈折のシステムは「声調格 (tone case)」(Schadeberg 1986, Marten & Kavari 2005, Kavari et al. 2012) と呼ばれる。以下、グロスでは、基本形は D、補語形は C、提示形は P をクラス番号に付す。

- (13) a. **oʃi-hape** ʃá-u 「果物が落ちた。」
7D-fruit SM7.PST-fall.FV
- b. mbá-rand-á **oʃi-hápe** 「私は果物を買った。(単純遠過去)」
SM1SG.PST-buy-FV 7C-fruit
- c. **óʃi-hape** 「(それは) 果物だ。」
7P-fruit

これらの屈折形(すなわち接頭辞の声調形)は、名詞が現れる文の種類や活用形、文中の位置によって使い分けられる。補語形は、過去・習慣・継起形(ただし WH 疑問文は除く)の動詞直後に現れる場合、提示形は、「それは〜だ」といったコピュラ文の場合、基本形はそれら以外の場合に用いられる。補語形が置かれる動詞直後という位置は目的語の定位置だが、(14) が示すように目的語に限らずこの位置に置かれる名詞は補語形で現れる。また、目的語でも(15) のような WH 疑問文や(16) のような過去・習慣・継起形以外の活用形の

場合には、基本形で現れる。

- (14) mokuti mú-rár-a ođó-ngéjama
LOC18.forest SM18-sleep-FV 10C-lions

「森ではライオンが寝ている。」

- (15) oúŋe gwé-mu-pé ojí-hávéro
who SM3SG.PST-OM3SG-give.FV 7D-chair

「誰が彼に椅子をあげたの？」

- (16) mé-rand-á ojí-hape
PRG.SM1SG-buy-FV 7D-fruit

「私は果物を買おうとしている。(現在進行)」

過去・習慣・継起形の動詞直後には補語形が用いられるのが基本だが、これらの中にも否定の場合には例外的に基本形が用いられる活用形もある。また前置詞によっては屈折形を入れ替えるものもある。補語形が用いられるこれらの場合について、それらの条件を一般化するには至っていない。補語形が用いられる条件・環境については、稿を改めたい。

3. 適用される音韻規則

2.2 で示した名詞語幹と 2.3 で示した名詞接頭辞が結合する際には、次のような規則が適用される。

- (17) 規則 I. 名詞接頭辞の H は右隣の音節に拡張する。

規則 II. 名詞接頭辞を含めて H が 3 つ以上並ぶと 2 つめ以降の H は低く現れる。

規則 III. L があると、それより右の H は低く現れる (=ダウンドリフト)。

以下、それぞれの規則を詳しく見ていくことにする。

●規則 I

名詞接頭辞の H は右隣の音節に拡張する。補語形の名詞接頭辞は 2 音節め、提示形は 1 音節めにそれぞれ H があるが、それらの H は右隣の音節に拡張する。

(18) oǃi-hape > oǃihápe 「果物（補語形）」

(19) óvi-maríva > óvímárviva 「お金（提示形）」

ただし拡張するのは名詞接頭辞の H だけで、名詞語幹の H は拡張しない。たとえば (20) の「庭」は語幹の 1 音節め、(21) の「パイソン」は語幹の 1 音節めと 2 音節めにそれぞれ H があるが、それらは拡張しない。

(20) oǃi-kúnino *oǃikúnínino 「庭（基本形）」

(21) omu-ǃóróǃgondo *omuǃóróǃgóndo 「パイソン（基本形）」

拡張するのは右隣の音節までで、それ以上には拡張しない。

(22) a. omú-paǃgure > omúpáǃgure 「裁判官（補語形）」

*omúpáǃgúre

b. ómu-paǃgure > ómúpáǃgure 「裁判官（提示形）」

*ómúpáǃgure

提示形の名詞接頭辞は 1 音節めに H があり、それが右隣りに拡張するため、提示形の名詞接頭辞は常に HH で現れることになる。これについて、提示形の声調がもともと HH であると考えられることもできそうであるが、もし提示形の名詞接頭辞の基底声調が HH であれば、2 音節めの H が右隣の音節、すなわち名詞語幹頭の音節に拡張するはずである。しかしながら (22) を見ると、H は名詞語幹頭には拡張していない。したがって、提示形の HH は、HL の 1 音節めの H が規則 I によって右隣りに拡張した結果であると考えられるべきであろう。

● 規則 II

名詞接頭辞を含め H が 3 つ以上並んだ場合に 2 つめ以降の H は中平板調 (M) で現れる。以下の例では、[ā] のように表す。

- (23) a. orú-táví [orútāvī] 「枝 SG (補語形)」
 cf. b. oru-táví [orutáví] 「枝 SG (基本形)」
- (24) a. omú-káđóna [omúkáđóna] 「娘 SG (補語形)」
 cf. b. omu-káđóna [omukáđóna] 「娘 SG (基本形)」
- (25) a. óma-mwínine > ómámwínine [ómámwīnīne] 「キャンドル PL (提示形)」
 cf. b. oma-mwínine [omamwínine] 「キャンドル PL (基本形)」

この現象は、①名詞接頭辞の H を含む、②3 つ以上の H が連続する、という 2 つの条件が重なった場合にのみ起こる。したがって (26) のように名詞語幹だけで H が 3 つ連続している場合や、(27) のように名詞接頭辞を含んでも H が 2 つしか連続していない場合には、この現象は起きない。

- (26) omu-káđéndú [omukáđéndú] 「女 SG (基本形)」
 (27) ojĩ-pwíkiro [ojĩpwíkiro] 「貯蔵庫 SG (補語形)」

● 規則 III

L が現れると、それより右にある H は低く現れる。これはダウンドリフトと呼ばれる現象である。L が現れるたびにそれよりも右に位置する H は少しずつ低く実現されるため、(28) や (29) が示すように H も L も数段階の高さで実現される。また (28) のように単語頭に近い L と語末に近い H では、実際の高さがほとんど同じ、あるいは H のほうが L よりも低く実現されることもある。

- (28) ójĩ-hakáutú > ójĩ-hakáutú [ójĩhakáutū] ($\overset{\sim}{-}\overset{\sim}{-}\overset{\sim}{-}\overset{\sim}{-}$) 「芋 SG (提示形)」
 (29) ójĩ-ǰáuví > ójĩ-ǰáuví [ójĩǰáuvī] ($\overset{\sim}{-}\overset{\sim}{-}\overset{\sim}{-}$) 「クモ SG (提示形)」

このように、声調素は H と L の 2 段階であるにも拘らず、II や III のような規則によって音声的には数段階の声調が聞かれる。本稿では、低めに現れる H のみを中声調 (M) として扱うこととし、L が H より高く現れたとしても、それは L として扱う。また、中声調は [] に入れた場合にのみ表記することとし、[] に入れていない場合は H で表記する。

4. 実現形

2 節では名詞語幹と名詞接頭辞の声調パターン、3 節ではそれらが結合される場合に適用される音韻規則について述べた。この節では、実際にそれらが結合された 3 種類の屈折形の実現形を見ていく。2 節と 3 節では、名詞接頭辞が 2 音節という最も基本的な場合のみの説明をしてきたが、この節では名詞接頭辞が 1 音節の名詞、名詞接頭辞が付かない名詞も含めて、すべての名詞の声調パターンの屈折形の実現形を提示する。

4.1 名詞接頭辞が 2 音節の名詞

まず、最も基本的な 2 音節名詞接頭辞が付く名詞の例である。名詞の基本形の例はすでに (6) ~ (10) で挙げているが、次の (30) ~ (54) には、名詞語幹の音節数別に、それらの名詞の各屈折形の現れ方を挙げる。それぞれ、a. は名詞接頭辞が LL の基本形、b. は名詞接頭辞が LH の補語形、c. は名詞接頭辞が HL の提示形である。実現される際には、これらの名詞接頭辞が名詞語幹に付加され、(17) に示した規則が適用される。

1 音節名詞語幹

(30) a. LL-L omu-ðe [omuðe] 「根 SG」

b. LH-L omú-ðe > omúðé [omúðé]

c. HL-L ómu-ðe > ómúðe [ómúðe]

(31) a. LL-H omu-tí [omutí] 「木 SG」

b. LH-H omú-tí [omútí]

c. HL-H ómu-tí > ómútí [ómútí]

2 音節名詞語幹

- (32) a. LL-LL ofi-hape [ofihape] 「果物 SG」
 b. LH-LL ofí-hape > ofíhápe [ofíhápe]
 c. HL-LL ófi-hape > ófíhape [ófíhape]
- (33) a. LL-LH ofi-vavá [ofivavá] 「翼 SG」
 b. LH-LH ofí-vavá > ofívává [ofívāvā]
 c. HL-LH ófi-vavá > ófívavá [ófívavā]
- (34) a. LL-HL ofi-tíha [ofítíha] 「机 SG」
 b. LH-HL ofí-tíha [ofítíha]
 c. HL-HL ófi-tíha > ófítíha [ófítíha]
- (35) a. LL-HH oru-táví [orutáví] 「枝 SG」
 b. LH-HH orú-táví [orútáví]
 c. HL-HH óru-táví > órútáví [órútáví]

3 音節名詞語幹

- (36) a. LL-LLL omu-paŋgure [omupaŋgure] 「裁判官 SG」
 b. LH-LLL omú-paŋgure > omúpáŋgure [omúpáŋgure]
 c. HL-LLL ómu-paŋgure > ómú-paŋgure [ómupaŋgure]
- (37) a. LL-LLH ou-tukaré [outukaré] 「衰え・弱さ」
 b. LH-LLH ou-tukaré > outúkaré [outúkarē]
 c. HL-LLH óu-tukaré > óútukaré [óútukarē]
- (38) a. LL-LHL ovi-maríva [ovimaríva] 「お金 PL」
 b. LH-LHL oví-maríva > ovímáríva [ovímāríva]
 c. HL-LHL óvi-maríva > óvímáríva [óvímāríva]
- (39) a. LL-LHH ofi-nambáká [ofínambáká] 「カエル SG」
 b. LH-LHH ofí-nambáká > ofínámábáká [ofínámábākā]
 c. HL-LHH ófi-nambáká > ófínambáká [ófínambūkā]
- (40) a. LL-HLL ofi-pwíkiro [ofípwíkiro] 「収納庫 SG」
 b. LH-HLL ofí-pwíkiro [ofípwíkiro]
 c. HL-HLL ófi-pwíkiro > ófípwíkiro [ófípwíkiro]

- (41) a. LL-HLH oʃi-ʃáuví [oʃiʃáuvĩ] 「蜘蛛 SG」
 b. LH-HLH oʃi-ʃáuví [oʃiʃáuvĩ]
 c. HL-HLH óʃi-ʃáuví > óʃiʃáuví [óʃiʃáuvĩ]
- (42) a. LL-HHL omu-káðóna [omukáðóna] 「娘 SG」
 b. LH-HHL omú-káðóna [omúkáðóna]
 c. HL-HHL ómu-káðóna > ómúkáðóna [ómúkáðóna]
- (43) a. LL-HHH omu-káðéndú [omukáðéndú] 「女 SG」
 b. LH-HHH omú-káðéndú [omúkáðéndū]
 c. HL-HHH ómu-káðéndú > ómúkáðéndú [ómúkáðéndū]

4 音節名詞語幹

- (44) a. LL-LLLL oʃi-jariθiro [oʃijariθiro] 「印 SG」
 b. LH-LLLL oʃi-jariθiro > oʃijáriθiro [oʃijáriθiro]
 c. HL-LLLL óʃi-jariθiro > óʃijariθiro [óʃijariθiro]
- (45) a. LL-LLHL oðo-reθeváte [oðoreθeváte] 「村 PL」
 b. LH-LLHL oðó-reθeváte > oðóréθeváte [oðóréθeváte]
 c. HL-LLHL óðo-reθeváte > óðóreθeváte [óðóreθeváte]
- (46) a. LL-LHLL oʃi-naŋgúθuna [oʃinaŋgúθuna] 「カニ SG」
 b. LH-LHLL oʃi-naŋgúθuna > oʃináŋgúθuna [oʃináŋgúθuna]
 c. HL-LHLL óʃi-naŋgúθuna > óʃinaŋgúθuna [óʃinaŋgúθuna]
- (47) a. LL-LLHH omu-korombátá [omukorombátá] 「ミミズ SG」
 b. LH-LLHH omú-korombátá > omúkórombátá [omúkórombātā]
 c. HL-LLHH ómu-korombátá > ómúkórombátá [ómúkórombātā]
- (48) a. LL-LHLH oʃi-hakáutú [oʃihakáutú] 「芋 SG」
 b. LH-LHLH oʃi-hakáutú > oʃihákáutú [oʃihākāutū]
 c. HL-LHLH óʃi-hakáutú > óʃihakáutú [óʃihākāutū]
- (49) a. LL-HHLL omu-ðóróŋgondo [omu-ðóróŋgondo] 「パイソン SG」
 b. LH-HHLL omú-ðóróŋgondo [omúðōrōŋgondo]
 c. HL-HHLL ómu-ðóróŋgondo > ómúðōrōŋgondo [ómūðōrōŋgondo]
- (50) a. LL-HLHL oðo-húŋguríva [oðohúŋguríva] 「ニワトリ PL」

- b. LH-HLHL oðó-húŋguríva [oðóhúŋguríva]
 c. HL-HLHL óðo-húŋguríva > óðóhúŋguríva [óðóhúŋguríva]
- (51) a. LL-HHLH oma-kúríhūŋgí [omakúríhūŋgí] 「人生 PL」
 b. LH-HHLH omá-kúríhūŋgí [omákúríhūŋgí]
 c. HL-HHLH óma-kúríhūŋgí > ómákúríhūŋgí [ómākúríhūŋgí]
- (52) a. LL-HLHH oru-kwéŋaéré [orukwéŋaērē] 「ウサギ SG」
 b. LH-HLHH orú-kwéŋaéré [orúkwéŋaērē]
 c. HL-HLHH óru-kwéŋaéré > órúkwéŋaéré [órúkwéŋaērē]

5 音節名詞語幹

- (53) a. LL-LLLLLL oma-rarakanenu [omararakanenu] 「競争 PL」
 b. LH-LLLLLL omá-rarakanenu > omárarakanenu [omárarakanenu]
 c. HL-LLLLLL óma-rarakanenu > ómárarakanenu [ómárarakanenu]
- (54) a. LL-HHHHLL oma-θérékárérwa [omaθérékárérwa] 「物語 PL」
 b. LH-HHHHLL omá-θérékárérwa [omáθērēkārérwa]
 c. HL-HHHHLL óma-θérékárérwa > ómáθérékárérwa [ómáθērēkārérwa]

以上に示したのが、2音節の名詞接頭辞を持つ名詞の各屈折形の実際の現れ方である。

4.2 名詞接頭辞が1音節の名詞

ここでは名詞接頭辞が1音節の名詞、すなわち5クラスと9クラス(表1参照のこと)の声調形と、その実現形を見ていくことにする。

表1が示すように5クラスと9クラスは名詞クラス接頭辞がφのため名詞接頭辞は冒頭母音Vのみの1音節である。基本形の名詞接頭辞LLはもともとHを持っていないため、名詞接頭辞が1音節の場合にもLで現れ、名詞語幹の声調形はそのまま保たれる。ところが補語形と提示形は、名詞語幹が1音節の名詞と2音節以上の場合で振るまいが異なっている。

まず名詞語幹が1音節の場合の説明をする。基本形の名詞接頭辞はLで現れ、名詞語幹の声調はそのまま保たれる。

(55) 基本形 : L < LL

- a. L-L e-i [ei] 「卵 SG」
- b. L-H e-ná [ená] 「名前 SG」

補語形の名詞接頭辞の声調形は LH だが、名詞接頭辞が 1 音節の場合には H を担うセグメントがなく、H はフローティングすることになる((56) と (59) の L の右隣にある ´ はフローティング H を表す)。名詞語幹が 1 音節の場合は、このフローティング H は名詞接頭辞に結びつく。提示形の名詞接頭辞の声調形は HL だが、L が落ちて H のみになる。したがって 1 音節名詞接頭辞の場合には補語形と提示形の名詞接頭辞がいずれも H で現れる。また名詞語幹は、基底の声調形に関係なくすべて L で現れる。結果的に 1 音節語幹の名詞は、(56) と (57) が示すように、補語形と提示形では名詞接頭辞も名詞語幹も声調形の違いが中和されてしまう。

(56) 補語形 : L´ < LH

- a. L´-L e´-i > éi [éi] 「卵 SG」
- b. L´-H e´-ná > éna [éna] 「名前 SG」

(57) 提示形 : H < HL

- a. H-L é-i [éi] 「卵 SG」
- b. H-H é-ná > éna [éna] 「名前 SG」

次に 2 音節以上の名詞語幹の場合について説明する。基本形の名詞接頭辞は L で現れ、名詞接頭辞の声調形が名詞語幹に影響することはなく、名詞語幹の声調形はそのまま保たれて実現される。以下に 2 音節名詞語幹の例を示す。

(58) 基本形 : L < LL

- a. L-LL e-tiva [etiva] 「芋虫 SG」
- b. L-LH e-korí [ekorí] 「帽子 SG」

- c. L-HH e-kúndé [ekúndé] 「大豆 SG」
 d. L-HL e-kópi [ekópi] 「カップ SG」

補語形の名詞接頭辞の声調形は LH だが、名詞接頭辞が 1 音節の場合には、L の後ろの H を担うセグメントがなく、H はフローティングすることになってしまうが、このフローティング H が現れる位置は名詞語幹が L で始まる場合と H で始まる場合とで異なる。名詞語幹頭が L の場合は、名詞接頭辞のフローティング H は (59) のように名詞語幹頭の音節に付与される。一方、名詞語幹頭が H の場合は (60) のように名詞接頭辞に H が付与される。以下に 2 音節名詞語幹の例を示す。

(59) 補語形 : L' < LH

- a. L'-LL e'-tiva > etíva [etíva] 「芋虫 SG」
 b. L'-LH e'-korí > ekórí [ekórí] 「帽子 SG」

(60) 補語形 : L' < LH

- a. L'-HH e'-kúndé > ékúndé [ékúndē] 「大豆 SG」
 b. L'-HL e'-kópi > ékópi [ékópi] 「カップ SG」

提示形の名詞接頭辞の声調形は HL だが、名詞接頭辞が 1 音節の場合には L が脱落し、名詞接頭辞は H のみとなる。以下に 2 音節名詞語幹の例を示す。

(61) 提示形 : H < HL

- a. H-LL é-tiva > étíva [étíva] 「芋虫 SG」
 b. H-LH é-korí > ékórí [ékōrī] 「帽子 SG」
 c. H-HH é-kúndé [ékúndē] 「大豆 SG」
 d. H-HL é-kópi [ékópi] 「カップ SG」

以下 (62) ~ (80) に、1 音節名詞接頭辞の名詞の各屈折形の現れ方を名詞語幹の音節数別に挙げる。それぞれ、a. が基本形、b. が補語形、c. が提示形で

ある。なお、1音節名詞接頭辞の名詞は名詞語幹が5音節以上のものは今のところ見つかっていない。

1 音節名詞語幹

- (62) a. L-L e-i [ei] (○-) ○ 「卵 SG」
 b. L'-L e'-i > éi [éi]
 c. H-L é-i [éi]
- (63) a. L-H e-ná [ená] (○-) ● 「名前 SG」
 b. L'-H e'-ná > éna [éna]
 c. H-H é-ná > éna [éna]

2 音節名詞語幹

- (64) a. L-LL e-tiva [etiva] (○-) ○○ 「芋虫 SG」
 b. L'-LL e'-tiva > etíva [etíva]
 c. H-LL é-tiva > étíva [étíva]
- (65) a. L-LH e-korí [ekorí] (○-) ○● 「帽子 SG」
 b. L'-LH e'-korí > ekórí
 c. H-LH é-korí > ékórí [ékōrī]
- (66) a. L-HH e-kúndé [ekúndé] (○-) ●● 「大豆 SG」
 b. L'-HH e'-kúndé > ékúndé [ékūndē]
 c. H-HH é-kúndé [ékūndē]
- (67) a. L-HL e-kópi [ekópi] (○-) ●○ 「カップ SG」
 b. L'-HL e'-kópi > ékópi [ékópi]
 c. H-HL é-kópi [ékópi]

3 音節名詞語幹 (理論的には8とおりで、見つかっているのは7とおりで)

- (68) a. L-LLL o-ndoroko [ondoroko] (○-) ○○○ 「ベチコート SG」
 b. L'-LLL o'-ndoroko > ondóroko [ondóroko]
 c. H-LLL ó-ndoroko > óndóroko [óndóroko]
- (69) a. L-LHL o-mbapíra [ombapíra] (○-) ○●○ 「紙 SG」
 b. L'-LHL o'-mbapíra > ombápíra [ombápíra]

- c. H-LHL ó-mbapíra > ómbápíra [ómbāpīra]
- (70) a. L-LHH e-indzámbo [eindzámbo] (○-) ○●● 「うそ SG」
 b. L'-LHH e'-indzámbo > éindzámbo [éindzāmbō]
 c. H-LHH é-indzámbo > éindzámbo [éindzāmbō]
- (71) a. L-HHL e-mwíníne [emwíníne] (○-) ●●○ 「ろうそく SG」
 b. L'-HHL e'-mwíníne > émwíníne [émwīnīne]
 c. H-HHL é-mwíníne [émwīnīne]
- (72) a. L-HHH o-ndzérérá [ondzérérá] (○-) ●●● 「明かり SG」
 b. L'-HHH o'-ndzérérá > óndzérérá [óndzērērā]
 c. H-HHH ó-ndzérérá [óndzērērā]
- (73) a. L-HLL e-θóroka [eθóroka] (○-) ●○○ 「フォーク SG」
 b. L'-HLL e'-θóroka > éθóroka [éθóroka]
 c. H-HLL é-θóroka [éθóroka]
- (74) a. L-HLH o-ηgáherá [oηgáherā] (○-) ●○● 「干し肉 SG」
 b. L'-HLH o'-ηgáherá > óηgáherá [óηgáherā]
 c. H-HLH ó-ηgáherá [óηgáherā]
- (75) 見つからない声調形
 L-LLH (○-) ○○●

(68b) では名詞語幹の 2 音節目 ro が H になっている。これは、名詞語幹頭の ndo にフローティング H が付与され、それが右隣の音節に拡張しているからである。つまり名詞語幹頭に付与された H は、「右隣の音節に拡張する」という名詞語幹の H の性質を保っているということである。同様の現象は 4 音節名詞語幹の (76b) と (77b) にも見られる⁶。

⁶ ただし (64) の e'-tiva > etiva では名詞語幹頭の H が右隣の音節には拡張していない。これ以外の「1 音節名詞語幹+LL 名詞語幹」の名詞の場合もすべて LHL で現れていることから「名詞接頭辞の H は語末音節までは拡張しない」という規則も考えられるが、(30b) のように名詞接頭辞の H が語末音節に拡張している 1 音節名詞語幹の例がある。したがって上記の規則があるにしても 2 音節名詞語幹の場合にのみ適用されるといった別の条件を追加しなければならない。この点についてはさらなる調査が必要である。

4 音節名詞語幹 (理論的には 16 とおりだが、見つかっているのは 5 とおり)

- (76) a. L-LLLL o-ndiripuku [ondiripuku] (○-) ○○○○ 「コウモリ SG」
 b. L'-LLLL o'-ndiripuku > ondírípuku [ondírípuku]
 c. H-LLLL ó-ndiripuku > óndírípuku [óndírípuku]
- (77) a. L-LLHL o-ŋgurukwéna [oŋgurukwéna] (○-) ○○●○ 「ハト SG」
 b. L'-LLHL o'-ŋgurukwéna > oŋgúrúkwéna [oŋgúrúkwéna]
 c. H-LLHL ó-ŋgurukwéna > óŋgúrúkwéna [óŋgúrúkwéna]
- (78) a. L-HHLL e-úmbúriro [eúmbúriro] (○-) ●●○○ 「歌 SG」
 b. L'-HHLL e'-úmbúriro > éúmbúriro [éúmbúriro]
 c. H-HHLL é-úmbúriro [éúmbúriro]
- (79) a. L-HHLH e-kúrúhūŋgí [ekúrúhūŋgí] (○-) ●●○○● 「人生 SG」
 b. L'-HHLH e'-kúrúhūŋgí > ékúrúhūŋgí [ékúrúhūŋgí]
 c. H-HHLH é-kúrúhūŋgí [ékúrúhūŋgí]
- (80) a. L-HLHL o-húŋguríva [ohúŋguríva] (○-) ●○●○○ 「ニワトリ SG」
 b. L'-HLHL o'-húŋguríva > óhúŋguríva [óhúŋguríva]
 c. H-HLHL ó-húŋguríva [óhúŋguríva]
- (81) 見つかっていない声調形
- a. LLLH (○-) ○○○●
 b. LHLL (○-) ○●○○
 c. LHHL (○-) ○●●○
 d. LLHH (○-) ○○●●
 e. LHLH (○-) ○●○○●
 f. LHHH (○-) ○●●●
 g. HLLL (○-) ●○○○
 h. HLLH (○-) ●○○●
 i. HHHL (○-) ●●●○
 j. HLHH (○-) ●○●●
 k. HHHH (○-) ●●●●

補語形では、語幹頭が H の場合は名詞接頭辞が H になる。また提示形は、語幹頭の声調に関係なく名詞接頭辞が H になる。したがって、名詞接頭辞が 1 音節で名詞語幹頭が H の名詞は、補語形と提示形が同じ声調形で実現されることになる ((63), (64), (68) ~ (71), (75) ~ (77))。

4.3 名詞接頭辞が付かない名詞

数は限られているが、taté「父親」や mama「母親」など名詞接頭辞が付かない名詞が存在する。これらはバントゥ諸語研究においては 1 クラスのサブグループ「1a クラス」として扱われる。これらは屈折形を表すはずの名詞接頭辞が付かないため、常に同形で現れる。(82) が 1a クラスの例である。比較のため、それぞれの対になる複数形の 2a クラス (名詞接頭辞は VV の 2 音節) の例を (83) に挙げる。

- (82) a. taté wá-u 「お父さんがこけた。」
 1father SM1.PST-fall.FV
- b. mbá-mún-ú taté 「私はお父さんを見た。」
 SM1SG.PST-see-FV 1father
- c. taté 「それはお父さんだ。」
 1father
- (83) a. oo-taté vá-u 「お父さんたちがこけた。」
 2D-fathers SM2.PST-fall.FV
- b. mbá-mún-ú oó-taté [oó-tātē] 「私はお父さんたちを見た。」
 SM1SG.PST-see-FV 2C-fathers
- c. óo-taté [óó-tatē] 「それはお父さんたちだ。」
 2P-fathers

5. まとめ

本稿では、ヘレロ語の名詞語幹の声調形と名詞接頭辞による 3 種類の屈折形、およびそれらが結合する際に適用される規則を報告した。これらは以下の

ようにまとめられる。

(84) 名詞語幹の声調形

2ⁿ とおり (n は名詞語幹の音節数) の声調パターンが存在する。したがって、名詞語幹の音節数が増えれば、それだけ声調パターンも増える。

(85) 名詞接頭辞の声調形

名詞接頭辞の形	VCV/VV	V
a. 基本形	LL-	L-
b. 補語形	LH-	L'-
c. 提示形	HL-	H-

3 種類の屈折が名詞接頭辞の声調形によって表される。したがって、いずれの名詞も 3 種類の実現形を有している。

(86) 名詞接頭辞と名詞語幹が結合する際の規則

- 名詞接頭辞の H は右隣の音節に拡張する。(規則 I)
- 名詞接頭辞を含めて H が 3 つ以上並ぶと 2 つめ以降の H は低く現れる。(規則 II)
- L があるとダウンドリフトが起きて、それより右の H は低く現れる。(規則 III)

これらの規則の結果、声調素としては H と L の 2 つであるが、音声的には数段階の高さが聞かれる。

(87) 2 音節以外の名詞接頭辞と名詞語幹との結合

- 名詞接頭辞が 1 音節の名詞の場合
 - 補語形：語幹頭が L の場合は名詞接頭辞の H がその語幹頭に結び付き、語幹頭は H で現れ、名詞接頭辞自体は L で現れる。語幹頭

が H の場合は名詞接頭辞が H で現れる。

- ・ 提示形：名詞接頭辞は H で現れる。
- ・ ただし 1 音節名詞語幹の名詞の場合は、語幹の声調形に関係なく、補語形も提示形もすべて HL で現れる。

b. 名詞接頭辞が付かない名詞の場合

基本形、補語形、提示形、すべて同形で実現される。

以上、本稿ではヘレロ語の名詞の声調について説明してきたが、名詞句や動詞句のなかでの名詞の現れ方、また動詞の声調との関わりについてはまったく述べることができなかった。ヘレロ語の動詞の声調については湯川 (1998) が最も詳しい。この他、Möhlig (2003), Marten & Kavari (2005), Möhlig & Kavari (2008) などがある。しかしながら、これまでの筆者の調査で、湯川 (1998) に報告されていない活用形、Marten & Kavari (2005) や Möhlig & Kavari (2008) とは活用形の声調が異なるケースなどが観察されている。ヘレロ語の声調体系の全体像を明らかにするためにも、動詞の声調についてのさらなる調査が必要であるが、それは今後の課題としたい。

略語

1SG・2SG・3SG: 一人称・二人称・三人称単数, 1PL・2PL・3PL: 一人称・二人称・三人称複数, C: 補語形, D: 基本形, FV: 非完了末尾辞, H: 高声調, L: 低声調, LOC: 場所, OM: 目的語接辞, P: 提示形, PL: 複数形, PST: 過去時制接辞, PRG: 進行, SG: 単数形, SM: 主語接辞

参考文献

- Eberhard, David M., Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2019) *Ethnologue: Languages of the World*. Twenty-second edition. Dallas: SIL International. <http://www.ethnologue.com>.
- Elderkin, E.D. (1999) "Word keys in Herero" *Afrikanistische Arbeitspapiere* 57: 151-166.

- Kavari, U. Jakura, L. Marten and J. van der Wal (2012) “Tone case in Otjiherero: head-complement relations, linear order, and information structure” *Africana Linguistica* 18: 315-353.
- Köhler, Oswin (1958) “Tongestalt und Tonmuster in der Infinitivform des Verbum im Herero” *Afrika und Übersee* 42: 97-110, 159-172.
- Marten, Lutz and J.U. Kavari. (2005) “Tone case in Herero: the coding of head-complement relations, linear order, and information structure” ms, SOAS University of London and University of Namibia.
- Möhlig, W. J. G. (2003) “The prosodological structure of Herero.” In Rose-Juliet Anyanwu (ed.) *Frankfurter Afrikanistische Blätter: Stress and Tone - the African Experience* 15: 165-179.
- Möhlig, W.J.G. and J.U. Kavari (2008) *Reference Grammar of Herero*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Möhlig, W.J.G., Lutz Marten and J.U. Kavari (2002) *A Grammatical Sketch of Herero*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Schadeberg, Thilo C. (1986) “Tone cases in Umbundu” *Africana Linguistica* 10: 427-445.
- 湯川恭敏 (1998) 「ヘレロ語動詞アクセント試論」『アジア・アフリカ言語文化研究』55: 191-235.
- 米田信子 (2012) 「ヘレロ語 (R31)」塩田勝彦 (編) 『アフリカ諸語文法要覧』257-271. 広島: 溪水社.